

「子どもを共に育む『親支援』プログラム」プロジェクト会議
第7回全体統括部会 摘録（案）

1 日 時：平成24年3月15日（木）14：00～15：40

2 場 所：ホテル本能寺 醍醐（ホール）

3 出席者：（全体統括部会）：西岡議長，小倉，寺田，丸橋，藤本（代理：松本），長谷川，長屋，藤田，岡本，大槻，生田，浅野

（妊娠期乳幼児期部会）：内山，山内，青山，飯吉，岩佐，谷口，松尾（代理：布川），森元（代理：荒武），布野，黒崎

（学童期思春期部会）：國重，日下部，石羽，林，小宮山，土肥（代理：戸塚），井上，中東，砂田，村田，近藤，中森，門間，富田

（プロジェクト会議事務局）：波床（代理：東），木村，江口，平井，有本，市田，宮本，柴原，中村

（順不同・敬称略）

4 次 第：（1）開会挨拶

（2）親支援プログラム「ほっこり子育てひろば」の充実策について

（3）青少年のための親学習プログラムの推進について

①中学校と保育所・幼稚園による「中学生と幼児とのふれあい体験」

②さらなる関係機関との連携による「青少年と乳幼児や妊婦との交流」

（4）閉会挨拶

.....

1 開会挨拶（西岡議長）

親支援プログラムは，策定においても苦労したが，それを実施し，継続，発展させていく中にも，多くの苦労があるかと思う。しかし，親支援プログラムは，親として必要なことを語り合っ
て学ぶ，参加型という有意義なものであり，今後の子育て支援における希望の光だと考えている。
この取組がこれからも発展することを願っている。

2 親支援プログラム「ほっこり子育てひろば」の充実策について

＜実施状況の報告＞（事務局）

22年度（開始時）から23年度（2月末）で，実施数は3倍（224→612回）に，参加者数は2.4
倍（3,382→8,003人）に増加した。特に，民営保育園，市立幼稚園，保健センター，小学校で
大幅に増加した。なお，妊娠期乳幼児期は，既存事業の中でプログラムを短縮して実施している
ものが多い。

アンケート結果については，全体を通して，「参加してよかった」が約99%，「不安が軽くな
った」が90%近くとなっている。

＜委員からの意見＞

委員： アンケート結果を見ると，満足した保護者が多いとの結果が出ているが，幼稚園や保育
園等，実施した施設の方に，親子の変化や施設として感じていることなどを伺いたい。

委員： さまざまな子育て支援の中の一つとして，親支援プログラムを実施しているが，良い効
果が出ているものもあれば，影響がなかったものもあると思う。今後良い影響が出るよう
に，定期的に行っていければと考えている。

議長： 親支援プログラムも他のさまざまな活動と相まって相乗効果がある。

委員： このプログラムは母親を対象としたものなのか。父親の参加はどれくらいあるのか。

- 議長： 策定や試行実施の段階から、土日に実施したら父親も参加できるのではないかとの話があったが、現状はどうか。
- 事務局： おやじの会にも委員として参画いただき、父親の視点も入れてプログラムを策定したが、平日の実施が多いこともあって、実際に参加している父親は数%と思われる。こどもみらい館では父親のための井戸端会議の場も作っているが、親支援プログラムへの父親の参加はまだ少ない。父親の参加は今後の課題だと考えている。
- 支援者の派遣も行うので、企業研修の場での実施も検討していただきたい。
- 委員： 私自身PTAの活動に関わるまでは育児に関心と関わりが少なかった。子どものことを学ぶたびに感じるものがあって、感じるによって子どもに接する方法やいろんなものが変わってきた。
- 議長： 企業の参加についてはどうか。
- 委員： 企業でも子育て支援をしようという流れがあるので、上手く企業にPRできればよいと思う。また、時間休を取り入れている企業もあるので、午前中だけでもプログラムに参加するという可能性はある。
- 委員： 「ほっこり子育てひろば」がきっかけで保護者同士のつながりができ、ボランティアグループができるまでになったケースがある。「ほっこり子育てひろば」で話し合ったことが子どもによい形で返っていく例だ。
- 議長： 支援者の養成に関して問題はるか。
- 事務局： 支援者については現在74名の登録があるが、現在活動しているのは30～40名ほど。スキルアップ講座を1年に数回実施しているが、支援者の力量は様々である。実施件数が増えれば、新たに養成講座も行う必要があると考えている。この取組を実施していく中で課題やプログラムの改善点を集約していかなければと考えている。
- 委員： 私が支援者をした中で、父親が参加している講座もいくつかあったが、熱心な父親もおられたり、母親に連れられて参加したけど子育ては母親任せにしていたと反省する方もおられたり、参加したことで夫婦の会話のきっかけ作りとなった場合などもある。昨今は離婚する方も増えているが、そうなる前に、このプログラムに参加してもらい、夫婦円満や家族の絆づくりに役立てばと思う。
- 支援者については、熱心な方が多いが、研修も数の面でもいろんな意味で足りていない気がする。支援者に寄り添った形の研修をしていただけたらと思う。アンケート結果を見ていると、「参加してよかった」との感想が多いが、実際支援者として活動する中で、自分の立場や話していることが受けとめてもらっていると感じにくい中、自分の進行の仕方でもよかったのかどうか心配になる方もいるので、支援者同士が支え合えるような場があればと思う。
- 委員： 現在子育て中の方と子育てを終えられた支援者との間には、子育てに関して意識の差があると思うが、そのことについて学べるようなものはプログラムの中にあるのか。
- 委員： 参加する保護者にも年齢的なばらつきがあり、また小学生の保護者の中にも、中学生や高校生のお子さんもお持ちの方がおられたりと、さまざまな年齢層の方に参加いただいている。こうした年齢に幅のある参加者同士が意見交換する中で、同じ年齢層の母親とは違う意見を聞くことができる。
- また、「つながる」というテーマのプログラムでは、子育てを終えて地域活動を行う支援者等の進行によって、周りのいろいろな人との関わりや支えの中で子育ては成り立つものであることに気付いてもらえる。
- 委員： まだ保育園や幼稚園に行っていない乳幼児の保護者に、子育てに有益な情報が行き渡りにくい現状があるので、情報の発信について考える必要がある。
- 議長： 情報はたくさんあるが、必要としている人に適切な情報が渡るのは難しい。保健センタ

- 一では「ほっこり子育てひろば」を多く実施しているが、何か工夫していることはあるか。
- 委員： 保健センターでは、妊娠期のプレママ・プレパパ教室や赤ちゃんとお母さんを対象とした子育て教室の中でこのプログラムを活用している。
- 委員： 京都市では「こんにちは赤ちゃん事業」として90数%の新生児の家庭を訪問しており、その中で、継続的な支援の必要な方への支援の体制はできているが、その手前の方への日常的で緩やかな支援をどのように進めていくかは今後の課題と考えている。

3 青少年のための親学習プログラムの推進その他について

＜取組予定の説明＞（事務局）

- 目的
将来親になる世代の青少年に、親として必要な体験と学びを提供する。
- 方策
 - （１） 中学校と保育所・幼稚園による「中学生と幼児とのふれあい体験」
教育委員会及び中学校から、保育所・幼稚園へ、実施の協力を依頼。
 - （２） さらに関係機関との連携による「青少年と乳幼児や妊婦との交流」
児童館、保健センター、助産師会、社会福祉協議会等にも協力いただき、中学生をはじめとする青少年と、乳幼児や妊婦との交流を進めたい。
 - （３） （１）や（２）を実施するための事例集や体系的資料の作成
- 今後の進め方
「青少年の親学習部会（仮称）」を設置し、「青少年のための親学習プログラム」の検討を進める。

＜委員からの意見＞

- 委員： 資料５の「幼児との触れ合い活動」は、中学校の授業の一環として取り扱うということで、中身についてプロジェクト会議で取り扱うものではないという理解でよいのか。プロジェクト会議での議論の中身は資料４の（２）の「さらに関係機関との連携による『青少年と乳幼児や妊婦との交流』」ということか。
- 事務局： そうであるが、（２）が充実するということは（１）の「中学校と保育所・幼稚園による『中学生と幼児とのふれあい体験』」の充実にもつながると考えている。
- 委員： 児童館では10数年「中高生と赤ちゃんの交流事業」に取り組んでいるが、同種の取組が並行することになるので、アプローチの仕方の違いを明確にする等、住み分けが必要だ。資料５で示された内容は授業の中身なので、今後の取組については白紙の状態から始めるということか。
- 事務局： そのとおりであり、資料５の取組は、新学習指導要領で示されていることだから、今まで児童館でしていた取組を中学校でやらなければならないということではない。地域の事情に応じて、学校で調整して実施していくことになる。中学家庭科で全生徒が幼児と触れ合い、興味をもった生徒を児童館事業への参加につなげることや、中学校と児童館の共催、助産師会や社会福祉協議会の協力で事業を行う例もある。
- 委員： 深草の子どもネットワークでは、児童館が乳幼児と保護者を集め、中学校の授業時間中に、主任児童委員が入って、交流事業を行っている。
- 委員： 以前、保健所（現在の保健センター）に高校生が来て、授業で赤ちゃんとの交流をしていたことがあった。保健センターは赤ちゃんが常に出入りしている有用なところだ。
話は変わるが、思春期の時期は、親子共に大変な時期なので、専門の精神科医や婦人科医を招いて、思春期における心身の変化の正確な捉え方や対応の仕方を聞く場をぜひ作ってほしい。

- 委員： 子どもが親に感謝できるような要素を「青少年のための親学習プログラム」に入れてほしい。親がなぜこれだけの苦勞をして自分を育ててくれたのか、自分も子どもができれば、子どもを守らなければならない、そのためには働かなければならない、人間と人間は協力して生きていかなければならないということを感じられるようなプログラムにすべきだ。
- 委員： わが学区では、赤ちゃんとの交流事業の前に、中学生が親に自分の出生時の話を聞くこともしており、親と話をするきっかけ作りにもなっている。ただ、父子家庭や母子家庭の場合もあるので問題もある。
- 委員： 乳幼児とのふれあいを中学生でするのは遅い。小学校高学年からするべきではないか。中学生と一口に言っても1年生と3年生では発達にかなりの差がある。どの時期に取り組むのかによって取り扱う内容が違ってくる。また、複雑な家庭環境を持つ子が増えているなか、自分の出生を振り返った時に複雑な思いをする子が出てくるので、配慮が必要だ。
- 親になるということは、人生設計の中の一つなので、「親になった時のため」というよりも、親になるかならないかも含めて、将来の人生設計が大切だ。
- 委員： 保育園では「生き方探究チャレンジ体験」で5日間中学生を受け入れている中で、今までの育ちを振り返った時に親への感謝を感想として言う生徒がいる。このような取組と「青少年のための親学習プログラム」がどのように組み合わせさせていくのか、どのような方向性になるのか、今後考えていく必要がある。
- 委員： 「生き方探究チャレンジ体験」は中学生が希望する各種職場等の体験をするものであり、「青少年のための親学習プログラム」を作ることによって、すべての子どもたちを対象にふれあい体験をしてもらうので意義深い。
- 親支援プログラムについては、親が子どもとどう向き合うのかについて効果のある内容が検討できたらと思う。
- 委員： 小中学校での家庭教育講座において、講師がなかなか見つからないと聞いているので、「親支援プログラム」を活用するように呼び掛けたらもっと参加者や実施回数が増えるのではないか。
- 「青少年のための親学習プログラム」には、既存のプログラムと組み合わせることによって幅が広がると思う。
- 議長： 「親支援プログラム」については、さまざまな情報交換ができた。「青少年のための親学習プログラム」については、すでに熱心に取組をしているところもあるので、既存の取組と上手く連携できるように検討できればと思う。

5 閉会挨拶（生田教育政策監）

親支援プログラム「ほっこり子育てひろば」は熱心な皆様の取組によって広がりつつあり、アンケート結果を見ても、多くの方から好評をいただいているが、まだまだ現在進行形のものなので、より良いものにしていかなければいけない。

「青少年のための親学習プログラム」については、関係機関と共に今後の在り方を検討していく必要があるので皆さんにご協力いただきたい。